

(2) 湖辺・川辺の植物

琵琶湖沿岸の植物の特徴のひとつは、大規模なヨシ群落の存在である。ヨシ群落は遠浅で比較的穏やかな水域にみられ、近江八幡の西ノ湖一帯、湖北の尾上・延勝寺地区、湖西のデルタ北部、南湖東岸などには大規模な群落が見られる。

最近では春から秋にかけて下流のワンドを中心にボタンウキクサ（ウォーターレタス）が繁茂して川面を覆いつくし遮光や溶存酸素低下などによる水質悪化や生態系への影響が懸念されている。10年程前から見られるようになったが、ここ数年は下流域で大繁茂している。熱帯性のため日本では越冬できないが、工場排水の影響により一部が越冬し、毎年この繁茂につながっていると考えられる。

ヨシ群落は、多くの水生動物や鳥類の生息空間として重要な役割を果たしている。また、屋根やよしずの材料として古くから利用され、人々の生活と密接に結び付いたものであった。しかし、近年は日常生活のなかで利用されることも少なくなっている。

また、琵琶湖の北湖東岸を中心とした砂浜には、ハマゴウ、ハマヒルガオ、ハマエンドウといった典型的な海浜植物が分布し、湖岸に近い森林の中には、タブ、スタジイ、ヒメユズリハ、モッコク、ヤマモモ等の海に近い温暖多雨な地域に分布する常緑広葉樹が混生している。これらは、かつて琵琶湖が海と連続していた時代が存在する可能性を示す貴重な遺存植物である。

淀川では、ヨシ群落、ヒメムカシヨモギ - オオアレチノギク群落、セイタカアワダチソウ群落、セイタカヨシ群落、オオキサビ - シバ群落、オギ群落が代表的な植物群落である。なかでも最大のヨシ原が鶴殿のヨシ原で、面積は75haに達する。また、下流のワンドにはヤガミスゲなどの貴重なものも生育している。しかしこれらの植物群も、人為的な影響を受けた代償植生、人工草地が多く、その自然性は必ずしも高いとは言えない。

桂川では、セイタカヨシ群落、ヤナギ群落、セイタカアワダチソウ群落が優先している。

木津川では、セイタカヨシ群落、セイタカアワダチソウ群落、ツルヨシ群落、オギ群落、ヤナギダテ群落、カナムグラ群落、メヒシバ - エノコログサ群落が主要な植物群落として分布している。

猪名川では、ヨシ、オギ、ツルヨシが代表的な植物であり、帰化植物が生育している。軍行橋より上流部ではツルヨシ、下流部ではヨシが見られる。

(3) 河畔林・湿地等の植物

琵琶湖集水域の河川には、ケヤキ、エノキ、ムクノキ等の落葉広葉樹やタブノキ、アラカシ、シラカシ等の常緑広葉樹等を構成種とする河畔林が成立しており、その林床には山地性のククザキイチゲ等の貴重な植物も生育している。

また、水田においてミズワラビ等の希少な植物が確認されたり、土砂採取跡地等に出現した湿地においてイシモチソウ、シラン等の希少な植物を含む群落が生育可能な環境が生育される場合もあることが確認されている。